

小説でいふいと
挿絵 高浜太郎

変幻装姫

SHINE MIRAGE

ソフィア

砕かれるプライド、穢される存在

立ち読み版



登場人物紹介

Characters



とうどういん さき
東堂院紗姫

東堂院財閥の令嬢。怪人に襲われた時、
聖なる光に包み込まれて変幻装姫シャイン
ミラーージュへと変身できるようになった。



シャインミラーージュ

異世界からの侵略者である悪の組織
ダーククライムと戦う変身ヒロイン。

ドルコス

ダーククライムの幹部。もの凄い筋力を誇るパワータイプ。



デブロ

幹部の一人。豚型の人獣。



ミスティ

幹部の一人。ゴスロリ姿の少女。



はかせ 博士

ダーククライムの頭脳担当。怪人や戦闘員を作り出している。

せんとういん 戦闘員

普段はシャインミラージュに一方的にやられてしまう戦闘員であるが……。

第一章	敗北の変幻ヒロイン	007
第二章	被虐と屈辱の肛虐調教	066
第三章	深夜の雌豚調教	117
第四章	ゴスロリ少女の魔の手	186
閑話	汚辱のザーメン当てゲーム	263

第一章 敗北の変幻ヒロイン

「お待ちなさい！ 逃がしませんわよ!!」

人気のない夜の道を、煌く金色のツインテールを揺らしながら走る一つの影。

鮮やかな青と白の配色のレオタード状のコスチュームは、たわなに実る乳房に張りのあるヒップ、豊満なボディラインを見せつけるように際立たせる。

背中は大きく開き、少女特有の若々しい白い肌が露出しているのも見逃せない。下へといくにつれて閉じていき、完全に肌を隠す細い腰部には、他に比べて強く存在を主張する大きな赤いリボン。そこから伸びる二本の布地がまるで尻尾のようにも見えた。

両腕には白のロンググローブを装着し、右手には武器であるレイピア。駆ける脚を守るのは、同じく白のニーハイブーツ。

顔には額から鼻の辺りまでを隠す桃色のバイザー、後頭部では腰部と同様の赤いリボンがハタハタと揺れる。奇抜とも言える衣装に身を包むのは、人々を守る正義のヒロインたる変幻装姫^{へんげんそうき}シャインミラージュ。

悪の組織『ダーククライム』と日夜戦い続ける彼女は、今夜、街に現れて暴れ出した狼型の人獣怪人と戦い、逃げ出したのを追いかけている最中だ。

「鬼ごっこはお終いかしら？ さあ、今度こそ覚悟なさい」

人気のない郊外の廃工場の敷地内に入ったところで立ち止まる怪人。レイピアを構えたまま、シャインミラージュは余裕たつぷりの声で言い放つ。

しかし、僅かに振り向いた時に見せた横顔は口元が吊り上がり、追い詰められているとは思えない表情。一瞬の間の後、狼怪人は工場の内部を目指して再び駆け出した。

「なんですの……気持ちの悪い笑みを浮かべて」



誘い出された？ 怪人の不自然な行動に疑問を覚える変幻ヒロインであったが、ここまで来て逃げるわけにはいかない。

「まだ時間がありますわね。たとえ異だとしても、あんな怪人に舐められるわけにはいきませんわ」

変身してから時間もそう長くは経っていない。先の戦闘時間も少なかったことを確認しながら、シャインミラージュは怪人を追った。

異が仕掛けられていても、自分ならば勝てるという絶対的な自信。連戦連勝の正義のヒロインに、負けるビジョンなど微塵も浮かぶことはない。

ある日、突如として現れた異世界からの侵略者『ダーククライム』によって、人々は恐怖に包まれることとなった。

いつ現れるとも知れない怪人や戦闘員。警察でも歯が立たず、ただ為す術もなく街を破壊され、時には無関係な一般人が連れ去られたこともある。

東堂院紗姫^{とうどういんさき}。東堂院財閥の令嬢たる彼女もまた怪人に襲われ、逃げている途中で光と共に宝石箱が目の前に現れた。

開けると聖なる光が彼女を包み、その身に神聖な力を宿すこととなり、変幻装姫シャインミラージュへと変身できるようになったのだ。

様々な力と僅かな制約を学びながら勝ち続ける変身ヒロインは、今やダーククライムの仇敵。多くの怪人達を討ち果たした無敵の存在。

そういった特別な存在であることを誇りに思うからこそ、誰にも見られていないとしても、ここで一時撤退の言葉はない。逃げた怪人を追い詰めるべく、闇に包まれた廃工場へと突入した。

「どこですの!? もう逃げ場はありませんわよ!!」
「グハハハハ!! 馬鹿め、まんまと異に填まりやがって!!」

周囲を警戒しながら奥へと進む変身ヒロイン。丁度

中央へと到着した頃だろうか、怪人の高らかな笑い声と同時に扉が閉まった。

まだ電気が生きているのか照明が点き周囲を照らすと、シャインミラージュの周囲の空間が歪み始める。今まで何もなかった場所に、大量の戦闘員が出現した。丁度変幻ヒロインを取り囲むようにして現れた、何十……いや百を超えるのではないかと数数の黒タイツの男達の敵意が、変幻令嬢へと突き刺さる。

「ふう、これが罠ですか？　いくら数がいようと雑魚は雑魚。わたくしの敵ではありませんわね」

「貴様のそういう生意気な態度が気に食わねえ!!　やれッ、戦闘員共!!」

怪人の命令と共に周囲の戦闘員が、シャインミラージュを押し潰さんと雪崩のごとく接近していく。

黒い集団に囲まれた逃げ場のない状態。だが変幻装姫の表情に焦りはない。強く地を蹴り、常人では考えられない高い跳躍を見せ、戦闘員達を強気な笑みのま

ま見下ろした。

「雑魚に時間を取られるわけにもいきませんし、能無しのお馬鹿さん達にはお仕置が必要ですよわね。マジカルフォーム!!」

凜とした言葉と共にシャインミラージュの身体を眩い光が包み、一瞬で弾けた。

直後に現れたのは、ピンクに変化した髪をポニーテールに纏め、髪と同じ色を基調とし、所々に白をあしらったフリルたっぷりのワンピース風コスチュームを新たに身に纏った姿。

短めのスカートの下には乙女の聖域があるものの、フワッと揺れるだけで見えそうで見えない悩ましさを際立たせる。ロンググローブの色もピンクに変わり、脚にはこちらも同色のタイツに白のハイヒール。

顔を隠すバイザーだけはそのままに、シャインミラージュは手に持った、宝石の埋め込まれたステッキを振りかざした。

「一網打尽ですわね。サンダースピア!!」

言い終わると同時に、まるで雷と見間違えるほどの雷撃が戦闘員蠢く廃工場の地面へと放たれた。地に落ちる轟音と共に、直撃した雑魚達の叫び声が響き渡る。

「邪魔ですわ。どいて貰いましょうか」

再びステッキを構えれば、工場の中からまるで嵐を思わせる強い風が巻き起こり、戦闘員達を次々に壁際へと吹き飛ばしていく。

絶対的な力。神聖なる力を身に宿した正義のヒロインが、勝ち続けてこれる理由がこの変身能力。シャインミラージュが思い描いた姿に変身でき、それに相応しい武器を手に戦うことができる。

長い滞空時間が終わり、落ちていく途中で再びシャインミラージュを光が包むと、直後には元のレオタードコスチュームに戻った。

彼女が一番多く使う愛用のフォーム、高機動接近戦用のストライカーフォームである。

「さあ、後はあなただけですわよ」

ステッキから変化したレイピアの切っ先と共に、既に勝利を確信した笑みを狼怪人へと向ける。

「おのれエ……シャインミラージュウ!!」

「激昂して襲い掛かってくるだなんて、やはり単純馬鹿のようですわね!!」

両手の爪を光らせて襲い掛かる怪人。振り下ろされる右腕を避け、続けて繰り出される左の爪撃を細い刀身で受け流し、無防備な腹部に蹴りを入れた。

「グウツ」という呻き声と共に後退する怪人を逃がすまいと接近し、今度はこちらの番とばかりに開始される変幻ヒロインの連続攻撃。

ただの戦闘員であればかわすことのできない速度であるが、流石に改造された怪人。高い反応速度でかわし、受け止め、時には攻撃を返すことも。

戦闘はシャインミラージュの攻勢で、どちらが優位であるかは一目瞭然。しかし、変幻ヒロインの攻撃も

直撃しない為に与えられるダメージは微々たるもの。勝利するにしてもこのままでは無駄に時間だけが経過していく。

そして、戦いの途中で気づく違和感に、変幻令嬢は口を開いた。

「あなた、まともに戦う気がありませんわね？」

「さア、どうだろうなア!!」

いかに劣勢とはいえ余りにも少ない反撃。逃げることしかできないから回避に専念するしかないと思っていたのだが、恐らくは違う。

この怪人は、最初から回避に重点を置き時間の経過を待っているのだとしたら――

(まずいですわね……もしかしたら、わたくしの弱点を見つけられてしまったのかも)

頭に思い浮かぶ最悪のシナリオ。無敵のヒロインに唯一存在する弱点。それは変身後の活動時間にある。

異世界の力を手にしたシャインミラージュであるが、

その強大な力は永遠に使えるわけではない。変身後、二時間程度が限界だ。

それだけの時間ならば十分に戦えると思われるが、必殺技などの強力な攻撃を行えばエナジーは減少し、その分活動時間は減っていく。

もしも限界を超えてしまったら、変化した姿のまま固定され、再びエナジーが回復するまでの二時間はただの少女のそれと同じになってしまう。

今までの戦いで限界を迎えたことはなかったが、ギリギリの戦いは何度かあった。もし、そういった部分を研究されていたのだとしたら。

(残り十分ほどかしら……このままだと埒があきませんわね。なら……)

僅かに見せた隙に仕掛けた怪人の攻撃をレイピアで弾く。怪人はなお余裕の表情で距離を空け、変幻令嬢の攻撃を待ち構えた。

「すぐに終わらせてさし上げますわッ!!」

レイピアの剣先を天井へと向けて垂直に構え、持つ手を胸へと持っていく。一瞬の集中の後、シャインミラージュは地を蹴った。

「なッ……!!」

「シャイン・スラスト!!」

その速度はまさに光速。怪人が反応することも許さず、目の前に接近した変幻ヒロインが、レイピアによる連続での突きを刹那に炸裂させる。

速度だけでなく神聖なエナジーを乗せた攻撃は全てにおいて強化され、怪人の防御を容易く抜け、その姿を消し飛ばしていった。

「ふう……悲鳴も出せないなんて、無様なものね」

怪人の罠を蹴散らした変幻ヒロインは、もう聞くこともできない相手へと言葉を残し、周囲に倒れる戦闘員に目もくれずに出入り口を開けた。

もしかしたら、誰かに見られているかもしれない。廃工場を出た辺りの人目につかない場所で変身を解除

しようと、扉から出た直後――

「戦闘員。まだいましたのね」

黒タイツに身を包んだ戦闘員達が外で待ち伏せをしていた。

しかも通常の戦闘員よりも皆大柄で、パワータイプを思わせる特別仕様。

「天下のシャインミラージュ様が相手じゃ、すぐにやられちまいそうだけだよ。お相手してくれや」

「まさか戦闘員相手に逃げたりなんてしねえよなあ?」

全員が全員、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべ、その口も粗野で下種なもの。変幻ヒロインの一番嫌いなタイプ相手。

残りの時間も考えれば一気に駆け抜けて振り切るのが一番であるが、戦闘員相手に逃げたくないプライドと、このような下種は叩き潰すべきだという怒りが、シャインミラージュの判断を戦闘へと傾かせた。

「いいでしょう。その言葉、後悔しないことねッ!!」

もう残りのエナジーの量から大技は使えない、ストライカーフォームで瞬殺するのが一番だと先手必勝で斬りかかった。多少の強化が施されようと所詮は戦闘員という驕りと、残りのエナジーからの焦りが、変幻令嬢の思考を単純化させる。

ギンッ!! と、まるで鉄を相手にしたかのような感触と音に、シャインミラージュはバイザー越しに目を見開いた。

「いつてえなあ。流石に痛みはあるが、大丈夫みてえだ。全員でかかるぞ!!」

改造されていたのは主に耐久性。戦闘員の着るスーツにも細工がされているのかもしれない。万全であればフォームチェンジで攻撃力重視にして仕留めるところであるが、今はそれも難しい。

我武者羅にただ殴りかかってくるだけであるが、現状ではこの数を全て処理するのは、流石に時間が足り

ない。

（悔しいですけれど、ここは一旦退くしかありませんわね）

高い防御力を誇る肉の壁に囲まれた状態ならば、逃げる場所はただ一つ。シャインミラージュは廃工場内部の時と同様に地面を強く蹴り、月を背にして高く舞い上がった。目的はこの敷地から脱出すること、視線は既にその出入り口へと注がれていた。

もしも余裕があったのなら、周囲の気配に気づき対応することも可能かもしれないだろう——しかし。

「よしかかった、今だ!!」

「え……きやあぁッ!? あぐううッ!!」

下から聞こえた声に気を取られた瞬間。工場の屋根に待ち構えていた戦闘員が撃ち出した大型の網によって、シャインミラージュの身体は捕縛されてしまった。

自由を失った変身ヒロインは目的の場所に辿り着く前に落下し、受身を取れないまま地面へと激突する。

高さが災いし、強い衝撃によって凍としたモノではない、ひび割れた声を上げてしまう。

「くう、こんな屈辱……急ぎませんと……ッ！」

単純な罠に填まった悔しさと強く両手を握り締める。網の材質はどうやら大したことはなく、すぐに切り裂くことができた。早く脱出しなければと駆けようとしたが、前方に黒い影が立ち塞がった。

「おいおいどうした？ 正義のヒロイン、シャインミラージュ様が逃げないでくれよ」

勝ち誇った笑みを浮かべる戦闘員達の言葉。それは今の稚拙な罠と相まって、プライド高いシャインミラージュを激昂させるに十分すぎるものだった。

「もう許しませんわ……覚悟なさい!! シャイン・スラストッ!!」

前にいるのは一人だけ。残りは背後や横。ならば必殺の一撃で倒した勢いで脱出すればいい。

頭に血が上った令嬢ヒロインは、先の怪人を葬った

のと同じ必殺技を戦闘員に繰り出した。

光速の連続攻撃が戦闘員を消し去る……はずだったのだが、現実には正義の変身ヒロインにとつて最悪な結末を描く。

「え……」

「それが必殺技かよ。効かねえなあ!!」

「あぐうううううッ!!」

レイピアの攻撃は戦闘員のスーツで止まり、それ以上ビクともしなかった。エナジー切れという最悪の事態を認識する暇もなく、戦闘員の拳が勢いよく変幻ヒロインの柔らかな腹部へとめり込む。

防御力も消えたただのレオタードはシャインミラージュを守ってくれず、大きく振りぬかれた一撃によって、変幻ヒロインは無様に吹き飛ばされ、背後にいる戦闘員にキヤッチされた。

「あ、あぐ……げほっ、ぐぶう……」

ビクビクと力なく身体を震わせる変幻ヒロインの口

からは、今まで出したこともない無様な呻きが漏れている。

内臓が潰れたかと思える激痛と衝撃に、言葉を発することもままならない様子。

「おいおい、正義のヒロイン様がこんなんでダウンしないであれよ。まだまだお楽しみはこれからなんだから？」

支えていた戦闘員がシャインミラージュを振り向かせると、彼に比べ小さな身体を抱きかかえ、押し潰さんばかりの力を込め始めた。

「ひぐうううあああッ!! あぎ、ぐうう……や、やめ……あああああッ!!」

内臓が圧迫されていく苦痛に叫ぶことしかできない。僅かに抵抗の言葉を口にしようとするも、少しでも力が強くなれば悲鳴へと変わってしまう。

無敵の変幻ヒロインの無様な敗北……だがこれは、彼女の地獄の始まりにすぎなかった。

※

廃工場に響く苦痛に満ちた悲鳴。無敵の力を誇っていたシャインミラージュは、改造されているとはいえ、ただの戦闘員一人の手で弄ばれていた。

モデル顔負けの抜群のプロポーションを持つ肢体が、強制的に弓なりに反らされて、ビクビクと震えている。戦闘員が力を入れれば必然的に悲鳴が上がり、まるでシャインミラージュは悪の手で奏でられる楽器のようだった。

「おい、その辺にしとけ。博士の話だと、今のこいつはその辺の一般人と変わらねえみてえだしよ」

「お、そうだな。生意気な正義の味方の悲鳴を聞けるのが気持ちよくてよ」

(よ、ようやく終わるんですの……?)

激痛で真っ白に染め上げられる意識の中で、僅かに聞こえる他の戦闘員からの制止の声。それが敵のモノでも、今の変幻令嬢には天使の言葉にも思えた。

身体を締め上げる腕の力が緩むと、堪らずに安堵の表情を浮かべるのは当然の反応。

「けど最後に少しだけ……フンッ!!」

「え……ひやぐうううああアツツ!!」

「ハハハッ！ 正義のヒロイン様がなんて声出しやがる」

終わりを迎えたことよって力が抜けたところを狙われ、再び強い力で変幻装姫の身体が圧迫される。

完全に油断していたシャインミラージュは、再び訪れたへし折れるかという激痛に、無様な絶叫を響かせた。

横で嘲笑う戦闘員達の声も聞こえない。バイザーの中で青色の瞳が大きく見開かれ、一滴の涙が頬を伝う。

ドサリと無造作に投げ捨てられた変幻装姫は仰向けに転がされ、解放されたにもかかわらず、指一本動かすことは叶わない。

時間と共に少しずつ痛みが和らぐにつれて明確にな

る意識。同時に変身ヒロインを襲う屈辱と敗北感。

ニヤニヤと余裕ぶつたまま、倒れるヒロインを見下ろす戦闘員達は、恐らくは体力と意識の回復を待っているのだろう。

このまま目を閉じ気絶した振りでもすれば、エナジの回復まで時間を稼げるかもしれない。

組織の本拠地へと連れて行かれる可能性も考えたが、今は藁にも縋る思いでその可能性に賭けるしか、無力な変幻令嬢にはできなかった。

（絶対に……絶対に許しませんわ。この屈辱は、回復したらその身体に返してあげますから）

力さえ回復すれば、この程度の相手を倒すことは造作もない。今はこの屈辱に耐える時だと、はらわたが煮えくり返る思いを鎮め、身体を静止させる。

「ピクリとも動かなくなっちゃったぜ」

「お前がやりすぎたからじゃねえのか？」

「チッ、面倒くせえな。博士の命令もあるし無理やり

にでも起こすか？」

憎き変身ヒロインを倒すまではよかったが、早くも
気絶してしまうのは戦闘員達も予想外だったのだろう。
やや動揺を含んだ言葉がいくつかシャインミラージュ
の耳に届いた。

（博士？ 怪人や戦闘員達を作っている存在かしら。
だとするなら、今回のこともそいつが？）

未だ全容を知ることのできないダーククライム。い
くらかの幹部を倒したヒロインであるが、それでもま
だ知らないことは多い。

新たに『博士』という存在を知ったシャインミラー
ジュ。だがその存在について深く考えることが許され
るのは、無事にここから脱出できればこそだ。

目を閉じて時間がすぎのを待つ変幻ヒロインの耳
に、何者かが近づく足音が聞こえた。

今度は何をする気なのか。先の激痛は確かに強く刻
まれており、高潔な変身ヒロインの心を不安で黒く塗

り潰す。

（何をされても……耐えてみせますわ）

緊張からごくりと唾を飲み込む。ただの少女にすぎ
ない現状で再び攻撃を受けてどうなるのか……想像す
るだけで心臓が高鳴るが、今は流れに身を任せるしか
ない。

もう、すぐ横に戦闘員は来ている。敗北の変身ヒロ
インは背後から抱え上げられ、上半身だけ起こされる
形を取らされた。そのまま、ピッチリしたコスチュー
ムに包まれたGカップの美爆乳が、無骨な男の手によ
って力強く揉まれ始める。

「……ッ……!？」

（なっ……いきなり何を……!？）

「変身ヒロイン様のオッパイ、すげえ柔らかいぜ!!
おっほう、この弾力!!」

耳障りな下卑た声が背後から響く。今までの人生の
中で、変幻令嬢の身体に男の手が触れたことなどほと

んどない。

だというのには今は最低な敵、しかも本来ならば問題なく倒せる雑魚戦闘員の大きな掌が、両の肉果実を無遠慮に捏ね回してくるのだ。

強い嫌悪感がシャインミラージュの身体を蝕み、すぐにでも身をよじって振り解きたい衝動に駆られるが、それは不可能なこと。

敗北の変幻令嬢にできるのは、ただ気絶した振りをしたまま、身体を弄ばれる恥辱と屈辱に耐えることだけ。

「おいおい一番乗りかよ」

「にしても本当に凄いな。変身ヒロインなんかじゃなく、AV女優にでもなった方がいいんじゃないかねえのか？」

「ハハハ！ いいなそれ!!」

（好き勝手に言ってる……こんな屈辱は初めてですわ……ッ）

他の戦闘員に見せつける為に、背後から伸びた大き

な掌が正面からヒロインのGカップ爆乳を強く掴み、手に余りあるほどの乳肉が指の間から溢れる。

それを見て、気絶していると思っっている変幻ヒロインを嘲笑う戦闘員達の言葉の数々。だが耐えてみせると、歯を食いしばって目を瞑る。

悪の手で弄ばれる敗北ヒロインの懸命な努力を試すように、美巨乳を揉みくちやにする戦闘員の手が、次のステップに進もうとしていた。

「お……この辺りか。本当に気絶してるかどうか、試してやるか」

「……はひいッ!!」

左右から中央に向けて押し潰し遊んでいた掌が、再び正面を弄り始めた。たっぷり十分は捏ね回された乳房から目的の位置を見つけた戦闘員は、ニヤニヤといやらしい表情を浮かべたまま、僅かに浮かび上がる突起を強く押し潰したのだ。

突如として身体を襲い流れる、強い電気を思わせる

予想外の刺激に、変幻ヒロインの閉じていた口は反射的に開いてしまった。

(ど、どうして……コスチュームに守られているはずなのに)

神聖なコスチュームに身を包んでいる状態で、乳首を押し潰されることなど考えてもいなかった。しかしエナジーの切れた今は神聖な守護はなく、ただの布きれではない。

しかも、本人は気づいていない部分ではあるが、強く乳房を揉み捏ねられるという屈辱を覚えながらも、雌としての身体はしっかりと反応していた。

「こいつ起きてやがったぜ」

「正義のヒロイン様が卑怯なことするじゃねえか。ならお仕置きが必要だ、な!!」

「くひいいいッ!! お、おやめなさい……こんなこと、本当に最低な屑共ですわね……んくふう!!」

気絶していた振りをしていた変幻ヒロインへと繰り返

出される罰。完全に位置を把握した戦闘員の指が乳首を押し潰し、鋭い刺激が身体を狂わせる。

グニグニと潰される度に身体中を流れる異質な感覚。声を上げまいと我慢しようとしても、初めての強烈な刺激に自然と口は開いた。

「その屑の手で乳首勃たせてるなんて、とんだ変身ヒロイン様だな」

「ち、乳首だなんてそんな……ひぐうううっ!! ち、乳首、引っ張っては……だ、ダメえ……!!」

「いつもの強気な態度はどうしたあ? そんな可愛らしい声はお前に似合わねえよ!!」

戦闘員の指で形を歪ませられるヒロイン乳首は、敵意溢れる言葉とは裏腹に僅かに硬さを持ち始めた。強い刺激に苛められることで、変幻令嬢の内に潜むマゾ氣質が、少しずつ呼び起こされていく。

シャインミラージュは自らの異質な性癖に気づけてはいないが、戦闘員達は気高いヒロインの本質に感づ

き、更なる責めを開始した。

桃色の突起を強く押し潰すように摘んだまま、限界まで引つ張り始める。まるで引き千切られるかという刺激と痛みに、堪らずに響く悲鳴。

未知の激感に耐えようと意志を固めるが、抵抗すれぱするほどに戦闘員達の嘲笑がマゾヒロインを蝕み、屈辱と羞恥に塗れていく。

「ヒヒヒ。変幻装姫様はマゾヒロインだったってことだな」

「ならそれに相應しい苛め方もしてやらねえと」

「な、何を言つて……あああッ！ この、いい加減にいあぐうあ!!」

限界まで乳首を引つ張り続けた戦闘員が指を離すと、伸ばされたコスチュームと一緒に乳房が戻り、たゆんつと弾む。

ようやく終わった乳責めに、力を失った変幻ヒロインは強気な言葉を飛ばそうとした。しかし、背後にい

た戦闘員に蹴られ、咄嗟に受身も取れずに上半身を地面に押しつける形となってしまう。

すぐに起き上がるようにとところで背中を踏みつけられ、まるで土下座のようなポーズを強制させられた。「まるで変身ヒロイン様が俺達に許しを請うてるみたいだな。オラ、今までのことを謝れば見逃してやつてもいいぜ？」

「……そ、そんなこと、本当に思つてもいない癖に……!!」

背中を踏んでいた足が移動し、鮮やかな金色の頭へと到達する。顔に傷をつけないようにと多少は優しくではあるが、後頭部をグリグリと踏み躪られ、地面とキスをさせられている極度の屈辱に変身ヒロインはわなわなと身を震わせた。

もしも土下座と謝罪で本当に見逃して貰えるとしたら、していただろうか。しかし、確実に嘘だとわかる言葉に釣られるほど、血迷つてはいない。

負け犬ヒロインの反抗的な態度に戦闘員達は何も返さなかった。ただ頭を踏みつける一人を除いた残りが背後へと回り、シャインミラージュの下半身を持ち上げて、恥辱の尻を突き出したポーズを強要させる。

何をされるのだろうか。戦闘員達の行動に予測がつかない変幻ヒロインは、ただただ後手に回ることしかできない。

突き出された美尻はポリウムたつぷりで、コスチューム越しにもその形はハッキリと確認できる。

「ヒロイン様のコスチュームも、こうすればもつと注目されていいんじゃないか?」

「んひいいいい!! そ、そこは、おやめなさい……すぐに手を、離してッ!!」

戦闘員が股間部を守るヒロインコスチュームを無造作に掴むと、紐状になるほどに強く引っ張り上げた。必然的に割れ目が擦り上げられ、無防備な身体は新たな刺激に口を開く。

このままでは大事な部分を全部見られてしまう。純潔の乙女は、キュッと食い込む自らのコスチュームからの刺激に耐えながら、必死に声を荒らげた。

普段の生意気な正義のヒロインからは見られない慌て振りを、戦闘員達は醜悪な笑みのまま眺めているだけ。

「安心しな。博士にはその辺りの開発は止められてるからよ」

開発とは何を言っているのか。しかし少なくとも今は少女の大切な部分は守られる。彼らが博士とやらの約束を破らない限りは……ではあるが。

僅かな安堵。ならば彼らはここから何をするつもりなのか。その疑問もまた、すぐに答えが出ることとなった。

紐状になったコスチュームは手から離され、尻肉の間に埋もれるいやらしいTバックと化していた。健康的な白い肌を持つムチ尻はさながら大きな白桃。まだ

熟れきっていない若い果実へと、黒い魔の手が伸びる。

「くうう……神聖なコスチュームに……いひいいいん!!」

ようやく後頭部から足がどけられて、顔の自由は利くようになったが、再び背中を押さえつけられればやはり身動きは取れない。

夜のひんやりとした空気が露出した肌に刺さり、放射的にフルフルと僅かに揺れた。まるで何かを訴える反応に比べ、戦闘員の大きな掌が尻肉を打ち据える。

胸の時と同様の突然の衝撃に変幻ヒロインは身体を跳ねさせた。痛みの直後に、ジンジンと尻肉が熱くなるのを感じる。

「悪いことしたガキにはこういうお仕置きが必要だよなあ。反省するまで好きなだけ叩いちまおうぜ!!」

「や、やめ……あひいいいい!! はああ、くふううううん!! お、お尻、叩くなんて……ひぐううああッ……あぐ、んぐうう!! いひいいいッ……あんう、あ

ひいいいんッ!!」

戦闘員の言葉を皮切りに、改造された男達の大きくゴツゴツとした掌が勢いよく振り下ろされていく。

パチン!! パァン!! ビチィッ!! パシィィン!!

「変幻装姫様のケツはいい音が響きやがるッ!! オラ、オラオラオラッ!!」

「もう真つ赤になつて猿みてえだな!!」
「くふううううッ!! んんぐう、んっんう!! んふううううッ!!」

（お、お尻が、こんなに叩かれて……こ、声を上げては奴らを喜ばせるだけ。こんな痛み程度で、屈するわけには……）

最初の連続での尻叩きでは、なんの準備もできないままに、戦闘員達を楽しませる敗北悲鳴を上げさせられた。

しかし、単純に叩かれるだけならば、激痛はどうに

もならないにせよ、声だけは押し殺し変身ヒロインの矜持を精一杯守ることはできる。

プライド高い令嬢にとつて、正義のヒロインにとつて当然の抵抗。いかに身体を好きにされても、心だけは屈しないという証。

だが今は気づけない。この痛みと恥辱によつて、変幻令嬢の心の深くの異質な扉が、少しずつ開いていったことを。

「必死に声を上げないように頑張ってるなんて、健気だねえ」

「ケツもこんなに真っ赤になっちゃまってんのによ。しかも腫れて立派なデカケツになってんじゃねえのか？」

「でもよ、無様な声を出してくれねえと楽しさ半減だよな」

身体を小動物のように震わせて必死に耐える無様なヒロインを小馬鹿にし、圧倒的な優越感に浸る黒タイ

ツの男達。

健康的で若々しい白い美肌は今や見る影もなく真っ赤に染まり、どれだけ乱暴に扱われたのかを容易に想像させる。

反応の小さくなつた変幻ヒロインへの不満を口にするものの、ケツ叩きの嵐がやむことはない。夜の廃工場に敗北した正義の使者へのスパンキング地獄の音だけが、ひたすらに鳴り響く。

（わたくしのお尻……どうなつてしまっているの……も、もう、感覚も……）

激しすぎるピンタの連続で途中から感覚がなくなつていた。身体を襲う衝撃だけが、今も自分の身体が責められているのだと理解できる材料。

戦闘員の言葉から推測するに、限界まで真っ赤に腫れて肥大化してしまっているのではないか。変幻令嬢自身も誇るプロポーシオン。それがこんな形で滅茶苦茶にされることになるだなんて、夢にも思っていないか



った。

幸運なのは感覚がなくなつたことで、声も多少は抑えられたことだろうか。それが功を奏したのか、このスパンキングもようやく終わりを迎えた。

「こ、これで終わりですの……？ 戦闘員らしい、根性のないこと……ですわね」

勿論、熾烈な尻叩きが終わつたところで解放されるだなんて甘い考えは持ち合わせてはいない。回復時間までの残りはおよそ半分、この調子ならまだ多くの屈辱を味わうであろうが、恐らくは耐えられる。

そう思うと、つい口から反抗的な言葉が出てしまった。背中を踏みつけられたまま、真つ赤な尻を突き出した恥辱のポーズを取っているヒロインにしては、滑稽そのものの反抗的な態度。

だがまだまだ高貴なプライドは折れていないことを示すには十分で、まだ楽しめると思っているのか、戦闘員達の表情に苛立ちはない。

「そうだなあ。俺達の根負けつて奴だ。いや流石はヒロイン様、痛みには強い強い」

「それじゃシャインミラージュもお待ちかねみたいだし、次にいこうぜ」

「ど、どんな責めを受けようとも、わたくしはあなた達には絶対に屈しませんわ」

「いいぜえ。俺達もお前を屈服させようと思つてるわけじゃねえ。楽しめればそれでいいんだよ」

背中を踏みつける足の重圧が消え再び自由を得る。しかし、震える両手に力を入れて上半身を起き上げさせても、ポロポロの変幻ヒロインは今も黒タイトスの男達に囲まれたままだつた。

どこを見回しても巨漢の戦闘員の醜悪な笑みが見下ろしている。あれは敗北者を嘲笑う下卑た顔。シャインミラージュはギリつと、悔しげに歯を食いしばつた。一人の戦闘員が、ゆつくりと近づいてくる。暗闇の中でよく見えないが、右手を股間に添えて何かを握つ

ているように見えた。

それがなんなのか、シャインミラージュは答えに辿り着く前に反射的に顔を背けようとしたが、穢れた金色のツインテールの片側を掴まれてしまう。

「な、なんですの……酷い臭い、近づけないでっ!!
い、嫌、いやああ……ッ!!」

逃げることも許されないうまに目の前に突きつけられた一本の棒。それがなんであるかの答えは頭の中に浮かんだものの、認めたくない一心で叫んだ。

少しずつ近づくとつれて悪臭も強くなり、ついにはバイザーにまで擦りつけられてしまう始末。黒ずんだ雄の象徴は、変幻ヒロインの素顔を隠すコスチュームの一部を穢し、まるでマーケティングするように擦り続けている。

「嫌じゃねえんだよ。強いヒロイン様が相手だからな、弱い俺達は色んな手段を使わなきゃいけないわけだ」

「こ、こんなことして……一体何が目的ですの……?」

鼻を穢す悪臭に苦しみながらも、シャインミラージュは必死に疑問を口にした。エナジーが切れたことによる戦闘能力の低下までを作戦に組み込み、それを成功させたにしても行動が異常すぎる。

回復するだろうということは容易に思い浮かぶはずだというのに、安全の為にさっさと連れ去る気配もなければ、回復する危険を考えてトドメを刺すこともない。

回復を待つ変幻ヒロインからすれば好都合ではあるのだが、ただ屈辱を与えたいというのであれば、もう成果は出ているだろう。

だがそれはシャインミラージュの頭の中の考えであり、余りにも浅い想像でしかなかった。

いくつもの作戦を邪魔し、怪人達を葬った忌々しいヒロインを相手に、すぐに終わるような罰は与えられないはずはない。

「目的も何も、俺達は指示された通りに動いてるだけ

だぜ。ま、ある程度は好きにさせて貰ってるけどなあ!!」

「んぶうッ!? い、今の、おちんちんで……んぐ、んむうん!?」

指示……やはり博士と呼ばれている男の仕業だろうか。僅かに意識がそちらに向いた瞬間だった。ベチイン! と、変幻令嬢の右頬が何かではたかれた。

生暖かくも硬い感触。それが戦闘員の極太肉棒である、即座に理解できた。令嬢の美しい頬が、今戦闘員の黒チンポによって強く叩かれた事実。

突然の出来事に目を見開く変幻ヒロインの今度は左頬が、戦闘員が腰を振ることで勢いを増して強く弾かれた。

黄金色のツインテールは両手でガッチリと掴まれ、完全に顔を固定された状態で、右・左・右・左と戦闘員の常人を超える肉槍が暴れまわる。

「ホラホラ!! チンポピンタ気持ちいいかあ!! 変幻

ヒロイン様をチンポで倒してやるよ!!」

（お、おちんちんで、わたくしの頬叩かれて……嫌こんな無様に穢されるだなんてえ……）

連続で行われる肉棒による激しい頬打ち。乳房への恥辱、尻への痛み、そして今度は頬を穢す戦闘員の下種な行動の数々。

痛みはあまり感じないまでも、それを補って余りある不快感が変幻装姫を覆い尽くす。

ビチイン! バチイン!! と、肉と肉がぶつかるにしてはやや太い音が耳元で響き、同時に鼻を雄の臭いが占領する。

目を瞑って悪夢のような状況を耐えようとしていたが、途中から段々と何かが飛び散り始めたと感じたのは気のせいだろうか。

うつすらと目を開くと、バイザーに僅かな水滴が付着している。いや、水滴と言うには粘性のあるそれは、酷くおぞましいモノに見えた。

(まさかこれ……精液……わたくしの顔が、こんなもので……)

いかにお嬢様といえども性知識は多少なりとも持っている。自分を叩いているのがペニスで、そこから出ているであろう液体であれば、想像するに難しくはない。

それが頬にも少しずつ付着し、まるで肌に塗りこまれている感覚に鳥肌が立ちそうになる。しかし、その嫌悪もまだ始まりにすぎないことを、令嬢ヒロインは理解していなかった。

「ふう、さあて……生意気なヒロイン様に、チンポを本格的に味わわせてやるとするか」

「まだ、これ以上どうやって穢す気ですか……？ ひっ……!!」

先ほど聞いた話では、どうやら処女を奪い犯すことは禁じられているらしい。僅かに持つ性知識だけでは、戦闘員達の次の行動が予測できずに身構えることも不

可能。

戸惑う変幻令嬢の眼前、カウパーで穢されたヒロインのバイザーへと戦闘員の肉チンポがビチンッ！と勢いよく叩きつけられた。

突然の行為に反射的に声を上げてしまった変幻ヒロイン。目の前には先ほどまで自分の頬を叩いていた陵辱者の象徴が。

(黒くて、太い……それに、先端辺りが拡がって……形も、どうしてあんなに歪いびつなんですか……お父様のは、こんなものじゃ)

幼い頃にふとした弾みで見ってしまった父親との違いを思い浮かべるが、事実として比べられるようなものではない。

変幻ヒロイン討伐の為の作戦に選ばれ改造された戦闘員は、勿論後々の為にその剛直も改造されている。

そんなことを知る由もないシャインミラージュは、こんなモノで叩かれていたという現実には吐き気すら催

第三章 深夜の雌豚調教

に脚を進めようとした中で、デブロの魔手が伸びていることに気づけずにいて。

「んひいひいひい!! こ、今度は、何をお……んほおお!! ち、チンポ……ケツマンコに、チンポ入つてえ!!」

容赦なく引き抜かれるステッキ尻尾が冷たい刺激を直腸へと与えたかと思えば、直後に訪れたのは熱く脈動する極太の肉棒。つい先ほど味わったばかりのデブロの肉棒が、敏感アナルを貫いたのだ。

「ここまで頑張ったからのう。ご褒美として大好きなチンポをハメたまま散歩じゃ。ほれほれ、進め進め!!」

「あひいひいああ!! だ、ダメツ……ち、チンポハメラれては……んほおツ!! す、進めない……ああ、ああん!! 抜いて、抜いてえ!!」

腰を掴んだままデブロはシャインミラージュのことを一切気にせずにピストンを開始する。ぽっこりと膨

らんだ腹部が震え、逆流しかけた精液が掻き回される。

散歩が終わるまでは抜く気がないのだろう。ガチガチに勃起したままのデブロの巨根は直腸を擦り、ムツチリとした尻肉が波打つように強く腰を打ちつけた。

なんとか手を前に出すも、ヒロインの細い腕は今にも折れそうなほどに震えていて。もう一步進むのと、デブロの肉棒が深く突き刺さったのが同時となり、ガクンと体勢が崩れた。

「こ、このままじゃ、終わらない……んああ、ひいひいひいん!! あん、あん、あおおお!!」

「終わらないのなら、人が来るまでこうしているまでじゃ。誰にも見られたくないのなら、進むしかないのう。ブヒヒヒ」

シャインミラージュの都合など、悪の怪人が知ったことではない。朝まで続いた場合、生徒達に雌豚散歩調教姿を見られてしまうということ。

改めてデブロが悪の怪人なのだと再認識させられな

がら、変幻令嬢は必死に腕を伸ばして前へと進んでいく。

「おほおお!! 強くしてはあ……もつと、優しくう……んほお!! あはあ、あひいん!!」

氣力を振り絞って進もうとするヒロインに合わせるようにして、デブロのピストンの速度や力強さも上がった。進む距離が伸びれば、その分激しく尻肉が腰とぶつかり合い乾いた音が耳に届く。

四つん這いでの散歩挿入という異常な調教によって、変態マゾとしての本能を刺激されながらも、それを必死に振り払い言うようにしてゴールを目指す。

「アレだけアナルを犯されていたというのに、正義のヒロイン様はよく頑張るのう」

「と、当然、ですわ……あんう!! あ、はひいん!! だ、ダーククライムの怪人の、好きになんて……んはああッ!!」

ゴールが遠い。だがないわけではない。一つの希望

を宿した正義のヒロインは、崩れかける心を纏め上げ、まだ屈していないと主張する。

嬌声に掻き消されながらも矜持を守ろうとするが、氣丈に振る舞えば振る舞うほどに豚怪人の嗜虐心を刺激する結果となるのだ。

「ではわしも悪らしく頑張らんといかん。一周するまで邪魔してやるから覚悟するんじやぞお!!」

散歩ということを忘れたかのように激しくなる豚怪人の腰の動き。唯一の救いは腰を掴んでいた手は離れ、進む分には自由であるということ。

しかし、変幻ヒロインの身体を蝕む肉凶器による蹂躞辱辱は、体力を奪い身体を悦楽の鎖で拘束し、まともに進むことが難しい。

まるでハイハイを覚えたばかりの赤ちゃんのように、両手足を震わせたまま、いつ崩れ落ちるともわからない状況なのだ。

「そおれ出すぞお!! 変幻装姫のケツマンコに、新鮮

なザーメンをプレゼントじゃあ!!」

「あはひいひいひいん!! もう、お腹、いっぱい……破裂、してしまうのお……あああ、ふ、膨らむ……んひいひいああ!! ち、チンポ、動くの……速い……!!」

悪魔の所業とも思えるアナル射精。既に膨らんでい腹部を更に重くさせる怪人の精液によって、今日だけで何度目の絶頂だろうか、変幻装姫の頭の中でスピークが起こり、情けなく絶頂を繰り返す。

腕の力が抜けて廊下へと崩れ落ちるヒロインは、気持ち悪さを覚えるほどに注がれた精液を身体で感じてしまう。その間にも豚怪人のチンポが止まることはなく、ザーメン塗れの直腸が荒々しく掻き回されていた。数メートル進むだけでも心が折れかねない暴力的な刺激。ガクガクと震える腕に力を入れて、身体を起こし進むシャインミラーージュ。

何度崩れ落ちただろうか。ようやく終わりが見えて

きた頃には、変幻ヒロインの目の強い光は薄くなり、口を半開きにした、蕩けきった弱々しい表情を晒していた。

デプロの精を注がれ続けた腹部は既に臨月を思わせる膨らみ方で、アクメを繰り返した為に溢れた淫蜜によって、ヒロインの太ももはお漏らししたように淫らに光っている。

「ブヒヒ!! よく頑張ったのう。もうすぐゴールじゃぞ?」

「あ……はあう……ご、ごーるう……もうすぐ、終わり……ですのね……あひいつ……はあん、あはあう!!」

意識も半ば失われている状態で見えてくるゴール。数時間はハメられっぱなしの肉棒調教の終わりが見えた変幻ヒロインの意識は、段々と覚醒していく。

苦すぎる敗北の記憶であるが、調教を終えて早く光陽学園の校舎から離れたい。再び溜まったエナジーに

よる逆転劇を考えることができず、激しい調教に晒された少女としては仕方ないこと。

だが悪の怪人が簡単にゴールを許すことはしなかった。最後の最後まで、豚怪人は変幻装姫という憎きヒロインの心を穢そうというのだ。

「折角豚鼻ヒロインになつとるんじゃから、ここからは豚のように鳴いてみせるのじゃ」

意識を覚醒させてからの最低の命令。無視して先に進みたかったのだが、首輪の効力が身体の動きを止めてそれを許さない。

(……どこまで……どこまでわたくしを辱めるつもりですの……)

高貴な令嬢たるシャインミラージュを身も心も穢すデプロの調教。意識はハッキリと戻ったものの、そのせいで今もアナルを擦り上げる剛直の存在をまともに感じてしまう。

自由を得る為には、逃れることのできない豚怪人に

よる命令をこなさなければならぬ。敗北のヒロインが取る選択肢は、最初から一つだけだ。

「ぶ、ぶひっ……ぶうひいつ……ぶひひい……!!」

覚悟したつもりではあったが、屈辱の豚の鳴き真似は想定よりも消極的なものだった。縦に伸びる二つの穴、潰れて皺のできる豚鼻に加えての惨めな豚鳴きという、人間としての尊厳を踏み躪る行為に、躊躇いが生まれるのは当然とも言える。

それが常人以上に育ちのよい、気高い令嬢ヒロインであれば余計に強い。

しかし、悪の怪人に正義のヒロインの心の在り方など関係はない。むしろそれを崩し、家畜にすることこそがデプロの目的。その手が止まることはなく、むしろ墮とす為に乱暴さを増す。

「ひぎいいひいんう!? は、鼻ああっ……ひっぱつてはあ、ひいぐ、いいぎひひい!!」

鼻の穴を無様に潰す非道の道具が、不意に強く引つ

張られた。引き千切られんばかりの激痛に悲痛な声がり、抵抗できずに顔が天井を向く。

首輪から伸びる鼻フック用の紐をデプロが持ち、グイグイと悪戯に引つ張り上げているのだ。痛みは数倍に膨れ、変幻装姫の瞳からは堪らずに、大粒の涙が頬を伝って零れ落ちていく。

「そんな中途半端な鳴き声では先に進ませるわけにはいかな。ほれもつとじゃ！ もつとしつかり鳴かんか!!」

「ひいひいっううぐ!! は、鼻、はながあ……ちぎれて、しまいますのおおつ……ぶ、ぶひっ！ ぶひひいん!! ぶひいう、ぶひっひいひいひいッ!!」

デプロが手を動かす度にガクガクと顎が跳ね、端正な顔が苦痛の豚面へと歪む。進むことも許されず、痛みを伴う非道の命令に、変幻装姫は屈服の豚鳴きを始めた。

「ブヒヒッ!! いいぞ、やればできるではないか。

ほれ、今の貴様がどういった存在か、鳴きながら教えて貰おうかのう」

（わ、わたくし……これでは本当の雌豚に……でも、言いませんと……終わりがあ……）

嗜虐心を満たすデプロの言葉は、続けての屈辱を正義のヒロインへと強いてくる。本当の雌豚へと成り下がらせる為と知りながらも、命令に従わなければ永遠に終わりは訪れない。

「ぶひひっ……!! わ、わたくし……シャインミラージュ、はあ……ひいぐっ!! ぶ、ぶひいっ……け、ケツマンコ射精されて悦ぶう……ぶひっひいぐ!! 淫らで最低な、雌豚ですのおお……ぶひい、ぶひひっひいん!!」

過去の調教で言わされた敗北の言葉を思い出しながらの、心を抉る雌豚宣言。途中で何度か鼻の穴が拡張される痛みに悶え、調教の終わりを希望として紡ぐその言葉は、虚しく震えていた。

「一応及第点じゃな。ほれ、では念願のゴールへ向けて再出発するかのう」

「……あ、ありがとう、ございますう……ぶうひいひい……ぶひっ!」

デブロの手が離れても、鼻の穴から伝わる痛みが大きく和らぐわけではなく、今も惨めな姿を晒しているのは変わらない。それでもだ、強引に引き上げられ行動を起こせないほどの苦痛が消えただけ、いくらかマシと思える。

豚怪人の機嫌を損ねない為に言葉の中で必ず豚鳴きを披露し、もう少し頑張れば辿り着くゴールへと向けて手を伸ばした。

冷たい廊下にピタリと、汚辱液に塗れたグローブに包まれた白い手が触れた。その瞬間だった。

「あひいひいひいっ!!」

ピチインッ!!

廊下の奥にまで響く乾いた音が、尻肉へと走る痛烈

な刺激と重なる。豊臀が震えるほどの一発は、忘れることのできないパンキングの記憶と同じ。

「な、何を……するんですの……んひいひい!! はあひい、ひぐうああっ!!」

鼻フック責めの手が緩んだかと思えば、次に始まったのは凶悪なビンタの嵐。柔らかく、敏感な尻果実から全身に駆ける被虐の激感に、突き出した手がそれ以上進まない。

「単純にゴールさせるのもつまらんからのう。ちよつとしたサービスじゃよ。それにしてもなんて声を出しおる。貴様は今自分を雌豚と認めたばかりじゃろうが。悲鳴も全部豚らしく鳴くんじゃよ。わかつたか!!」

「んひいひいあああっ!! わ、わかり、ましたわあ……ぶひいひいっ!! ぶ、ぶひっ、ぶひゃひいっ!!」

怪人の力を込めた重い一発が、変幻装姫の汗とザーメンに塗れたムチ尻を真っ赤に染めていく。豚チンポに栓をされている現状での怒涛のパンキングは、そ

のまま直腸にも響き反射的にキュウつと締めつけた。

「さつさと進まんと終わらんど。ほれ進め進め。この雌豚ヒロインめが!!」

予想通りと言える反応に気をよくしたデプロの尻ビンは続く。連打は少しばかり控えめになったが、それでも様々な角度から変幻装姫の魅惑のヒップは狙われ続けた。

一発ごとに白濁に染まった肢体を震わせながら、一杯の力を振り絞り手を前に出す。豚声ヒロインは、視界に入る終着点へと向けて、必死に踏ん張っていた。「ぶひいんっ!! ぶひい、ぶひひひっ!! ぶひひひいんおおおっ!!? ち、チンポおおっ……ぶひぶっひい!!」

(このまま、されてはああ……わ、わたくし……本物の雌豚になってしまいますのぉ……んうひいっ!! ケツマンコは、今はああ……ぶひ、ぶっひいん!!)

スパンキングの中で、時折交ぜられる肉棒による力

強い一突きが、痛み以上の極上の尻悦として身体を、脳を狂わせる。

痛みに耐えようとする堅い決意を溶かすような快感に、満足な思考が働かない。口にする言葉と、頭に浮かぶ言葉を混濁させながら、正義の変幻ヒロインは一匹の雌豚へと堕ちていく。

「ぶ、ぶひっ……ぶひいん!! んほおおおっ……ぶひい、ぶひいひいひいッ!!」

変幻令嬢の口から出る豚の鳴き声はデプロを大いに喜ばせ、同時に鳴いている本人の心を鋭い刃物で抉っていく。

「ブヒヒヒヒイ!! 雌豚家畜ヒロインの完成じゃのう!!」

聖なる学び舎に響く、正義の美少女ヒロインのぶひぶひという無様な豚声。下品な楽器を奏でるのが豚怪人という、余りにも異質な光景。

前から見れば、バイザーによってその双眸だけは隠



されているが、頬を伝う涙の跡、だらしなく開いた口から滴る唾液と垂れる舌、そして穴を見せつける豚鼻から緩みきった鼻水が汚く流れ、美少女ヒロインの顔がグチャグチャに穢れているのがわかるだろう。

短い距離の間に設定された命令は、変幻装姫の頑張りによってようやく、終わりを告げることとなった。

「ぶひいいうう!! はあう……ご、ご……ですわあ……」

「よく頑張ったのう。ではご褒美として、鼻フックを外してやるとするか」

階段へと辿り着いたと同時に崩れ落ちるシャインミラージュ。同時に首輪から伸びていた鼻フックが外れた。反射的に鼻へと手を伸ばし、異常がないかを確認する。

変に曲がったわけでも、大きく形が変わったわけでもない、触った感触である程度理解すれば、安堵の息が漏れた。

(……今回のも……ようやく、終わったんですね……)

もう三度目になる敗北調教。身も心も疲弊しきるほどに激しく変態的な行動の数々は、確実に変幻ヒロインの身体を蝕んでいる。

アナルに肉チンポを挿入される快感は誤魔化せず、無理やりに注がれた精液すらも嫌悪が薄くなってきた現実。

変化していく自分の身体に恐怖すら覚える変幻ヒロインだが、終わりと確信するには早すぎた。

「一旦溜め込んだザーメンを処理するとするかのう」
「んおおっひいつつ!!」

デプロがそう口にしたと思えば、尻穴へと肉槍を挿入されたまま抱え上げられ、散歩中に前を通ったトイレ——しかも男子用の——へと連れていかれたのだ。

普段から丁寧掃除をされているトイレは汚れが見当たらない。だがそれでも少女からすれば、男子トイ

レは穢れた場所という認識がある。

そんな場所へと連れてこられたかと思えば、排泄時に使用する個室へと押し込まれ、便座の蓋を上げた便器に座らされた。

「……な、何を、するんですの……？」

既にデプロの肉棒は引き抜かれ、今にも溜め込まれた精液が溢れ出そうと暴れているのを、括約筋に力を入れて必死に堪えるシャインミラージュ。状況的に最悪の予想が頭をよぎるが、それでも聞かすにはいられない。

首輪の効果でM字開脚姿を強制されて、手は後頭部で組んだ、覚えのある恥辱のポーズ。白濁に塗られて穢された正義のヒロインの姿は、精液便器と呼ばれてもおかしくないものであった。

「決まっておるじゃろう。あそこで出したのでは掃除が大変じゃろうと思つてな。ここで好きなだけ出すといい……そおれ!!」

「や、やめ——おごおおおおお!!」

ぼびゆるるるるるるううう!! びゅぶううううううう!! びゆるるるるッ、びゅぶるううううう!!

悪の怪人の前での排泄を躊躇うヒロインだったが、妊婦を思わせる精液腹へとデプロの拳がめり込んだ。逆流する一部の精液が口から溢れるのと同時に、力の抜けた尻穴から、下品な排泄音を立てて注がれてきた白濁液を噴出させる。

「んほおおおおおおッ!! ち、チンポ汁溢れるう!! ケツマンコからザーメン出すの、頭痺れるう!! ……い、イクッ……ザーメン排泄でイクうううううううん!! ぶひいひいひいひいん!!」

「排泄アクメまで極めるとはのう。変態マゾヒロインめ、いい具合に育つておるわい。それにもう雌豚散歩は終わったというのに豚声で鳴くとは、正義のヒロイン様は立派な雌豚じゃなあ。ブヒヒッ!!」

ザーメン排泄アクメという新たな悦楽に、意識を真

閑話 汚辱のザーメン当てゲーム

突然視界が闇に覆われた。両目と額を隠すバイザーの代わりの『何か』は、グルリと頭部の側面を通り後頭部で留められたようだった。

目隠しが目的であると即座に理解はできたが、問題はそのではない。鼻が曲がると思える異臭が漂い始めたのだ。

流石に無視することもできずに異変を口にするが、シャインミラージュの耳に飛び込むのは、戦闘員の非情な言葉。

「ああ、いいだろう？ 俺の使用済みのパンツだ」
全身の毛が逆立つ。聖なるバイザーの代わりとなっているのが、醜悪で最低な男が使用した後の下着だなんて。

「そんなっ……そんな馬鹿なことを……くひいうっ……あっ……!!」

丁度股間を隠していた部分が顔面に当たっているのだろうか。とにかく臭いと言えない変態臭に顔を

しかめ、つい外そうと手を伸ばした。

だが、白いロンググローブに包まれた細腕は掴まれ、頭の後ろに持つていかれてしまう。すぐにでも振り払うのは可能ではあったが、腕を止められた時に反抗してはいけないと我に返り、大人しくされるがまま。

ガチャリとした金属音と、両の手首を包むグローブ越しにも生じる冷たい感触。少し力を入れただけではビクともせず、ガチャガチャと耳元が騒がしくなるだけだった。

「その手錠も特別製らしくてな。簡単には壊れないつてよ。まあ正義のヒロイン様の全力ならわからねえが、そんなことをしたらどうなるか……わかってるものなあ？」

（こんな……目が、顔が腐ってしまいそうなあ……が、我慢、しなければ……爆弾が爆発してしまいますわ……）

今すぐにも全力で手錠を破壊し、顔を犯す穢れた

布をビリビリに破り捨ててしまいたいが、それは自殺行為だと知っている。

できるだけ口で呼吸をするように意識しながら、落ち着こうと深く息を吐いた。しかし、心臓の鼓動は令嬢ヒロインの思惑に反して早鐘を打っている。

「変態ヒロインならもつと脚を開かねえとな。そら、こんな感じかあ？」

「いい格好だな。またパイパンマンコを見せて欲しいもんだ!!」

(……我慢……我慢ですわ紗姫。いつか、この屈辱を晴らす為にも今は……んうほおっ……あ、脚動かされただけで、ケツ穴、響くうう……っ)

その最中、行儀よく閉じられていた脚が乱暴にこじ開けられ、大股開きの恥辱のポーズで固定する為に、椅子の脚に縛りつけられた。

つま先は外を向き、レオタード状のコスチュームに守られた股間がよく見える。変身美少女の秘め事を知

った戦闘員の野次に、心を揺さぶられながらも必死に口を閉じる。

考えるべきはゲームに勝つこと。恥辱の火が淫らに燃え上がり、被虐的な刺激に顔をのぞかせるマゾ性に惑わされ、ケツ穴刺激に襲われながらもシャインミラージュはグッと堪えた。

「さあ始めようぜ。先ずはチンポ汁の味を覚えるところからだ。馬鹿みてえに口を開け。そうだそれでいい……それじゃ俺からだッ!!」

「おおおおおうぶう!! んつぶじゅ、ぶじゅりゅぐぶつつ!!」

ズグンッ!! 精一杯に、餌をねだるペットのよう大口を開けたシャインミラージュの口腔へと、一気に戦闘員の勃起チンポがぶち込まれた。

自由の利かない身体を支える為か、それとも一方的に犯す快感が欲しいからか。黄金色の頭部はガツチリと掴まれ、固定された状態だ。

「おおお……これがシャインミラージュの口マンコか!! すごい気持ちいいぜえ!!」

極上の口膣の感触に感嘆の声を出し、相手が人間であるということも忘れて欲望のままに腰を振る。今までの恨みを晴らす乱暴なピストンに、変幻装姫の口からは潰れたカエルのような声が溢れた。

(い、いきなりこんなに激しく……くうっ……!!
く、口の中がいっぱい……鼻で、呼吸するしか……
ううう……下着と、チンポの臭いで、頭まで犯されて
ええ……!!)

歯を立てれば折られてしまうと錯覚する、肉欲の凝縮したガチガチの雄竿に掻き回される嫌悪感。せめてもの救いは、過去に何度か経験したことだろうか。

怪人達に比べて少しではあるが劣るということを知識するも、少女の小さな口の中を占領している事実に変わりはなく、呼吸は鼻でするしかない。

望まない汚臭が鼻腔をチンポの代わりに満たし、変幻ヒロインは顔の中と外の両方を一度に犯される錯覚に陥る。

「んつぶじゅ、じゅぼぶつ!! ぐぶぶ、じゅつぶぐ……
じゅぶうおお、んうじゅりゅつ!!」

奉仕ではない、性欲処理の為の肉槍による連続突きに、唾液に塗れた挿入音だけが繰り返し繰り返し響き渡る。

溢れ出るカウパー液が内部を濡らし、唾液が交わることで滑りをよくし、戦闘員の前後運動を助け、同時に口マンコヒロインを苦しめた。

「とても正義のヒロイン様がするポーズじゃねえよなあ。そらそら、チンポうまいか!! ハハハッ、返事もできねえか!!」

「見ろよ、鼻の穴がヒクついてやがる。パンツ巻かれて、立派な便器顔になってるみたいだな!!」

(勝手に、やらせたくせに何を……!! 誰が、便器な

などできるのだろうか。脳内に弾ける濃厚な肉悦にクラクラしながら、シャインミラージュは戦闘員が腰を引くまで、剛直を啞えさせられ続けた。

「ふうう……出した出したあ。すげえ気持ちよかったぜ」

「げほっ……はあ、ごほっ……んおほっ!!」

ズルウウつと、戦闘員の肉棒が引き抜かれるとシャインミラージュは咳き込んだ。新鮮な空気を欲して開いた口からは、ポタポタと欲望の残滓が床へと落ちていく。

身体の自由を奪われ、視界を塞がれていることが原因なのだろう。まだ一発目だというのに、予想以上の疲労感が身体を襲う。しかし疲れを知らない人工肉棒は変わらずに暴れ、吐く息を下品に変えた。

「それじゃ俺の番だ。シャインミラージュのこの格好、マジで興奮するぜ」

目隠しをされ椅子に拘束される姿は、手を封じる手

錠の存在も重なり、敗北し捕らえられた正義のヒロインとして戦闘員達の興奮を高めるのを手伝っていた。

目に見えて疲労しているシャインミラージュを無視し、二人目の戦闘員が近づく。段々と大きくなる低い声が接近を伝え、拘束されたヒロインは身体を強張らせた。

「そうら、よく味わえよ。ちゃんと違いがわからねえと爆発しちゃうからな」

「おむうううっ!! んぶうう、じゅっぶっ!! は、はへひっ……んぶじゅりゅう、んじゅぶぶっ!! んっぶう……じゅぼっ、ぶじゅううっ!!」

一人目と変わらずに、美少女ヒロインの口を性器に見立てての強いストロークの繰り返し。口腔内で残る白濁と唾液、そして新たな先走りが合わさり音を立てて攪拌されていく。

(さ、さっきの戦闘員と……形が、少し……違う……? 味なんて……こんな、同じい……っ!!)



った。まだ口の中に精液の味の残る状態で吐き出される、別の戦闘員の、同じような白濁液。

「んんんんうううっ?! んっぐ、ごきゅう、ごきゅう……んんつぶ、んんんんっ!!」

（あ、味の違いなんて……もつと、もつと飲みませんとお……!!）

喉を通る熱々のドロドロザーメンに違いが感じられない。多少の差異はあるのかもしれないが、ドルコス達ほどの大きな変化がないのだ

だが、わかりませんでしたで終わるわけにはいかない。口腔内の空気を全て消すほどに強く頬を窄め、一滴も余さずに飲み干そうと必死に音を立てて流し込む。「必死に吸いついてきやがって。そんなにチンポ汁うまいか? ハハハハッ!!」

戦闘員の嘲笑が、熱く苦いザーメンが、嗅覚を刺激する汚臭が、一つになって脳幹を貫き、弾けた。

絶頂に似た高揚感が豊満な肢体を覆い、精液の味を

確かめる変幻装姫の懸命な努力を阻害する。

自分も含めて三発目の白濁汁に体内を汚染される被虐的な悦楽が、変態的に調教された身体を揺さぶり脳を焼く。

「ぶあっ……ふう、あっ……んうぶうっ、ひゅぶっ!!
んんう……んっ」

頭を掴まれ、グイグイと最後の一滴まで飲ませようと、口マンコに擦りつけられていた戦闘員ペニスが離れた。

最後まで白濁粘液の違いを覚えられなかった変幻装姫は、段々と消えていく汚物感を追いかけるように、唇から離れた怒張へと自然と舌を伸ばしてしまう。

ポタリと、僅かに垂れた残滓が舌に落ち、目隠しヒロインは反射的に口へと取り込み丁寧に飲み込む。だが、人質を想つての彼女の行動は、傍目から見ればただの痴女のそれだ。

「そんなにザーメン欲しがらなくても、まだまだ後が

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>